久保田淳編
『吉田兼右筆十三代集　新後撰和歌集』

勅撰二十一代集のうち、中世に成った十三代集を影印し、解説を付して刊行する叢書の一冊で、平成七年に刊行された『玉葉和歌集』に次ぐ第二回配本である。

『新後撰和歌集』は第十三番目の勅撰集で、後宇多院の院宣により二条為世が嘉元元年（一三〇三）奏覧した。全二十巻、総歌数は一六〇七首である。兼右本は天文十九年（一五五〇）に書写された、列帖装一帖の写本である。この本を写真版によって収め、天の余白部分に『新編国歌大観』の歌番号を付してある。

解説は、「一　下命者・撰者」「二　成立過程」「三　主要作者」「四　兼右集とその他の伝本、翻刻、注釈書」から成る。「一」では後宇多院と二条為世の伝記的な事柄を摘記し、「二」では『嘉元仙洞御百首』との関係、為世とは対立していた京極為兼の『為兼卿記』におけるこの集への批判などについて述べている。また、「四」では尊経閣文庫蔵伝蜷川親元筆本や流布板本と兼右本との和歌の出入を、具体的に作品を挙げて示している。なお、巻末には初句索引と作者索引が付されている。

撰者為世は本集に十一首を自撰している。そのうち、巻第十七雑歌上の、

百首哥たてまつりし時千鳥
前大納言為世

和哥の浦や五代かさねてはま千鳥なゝたひおなし跡をつけつる（一三三〇）

という一首は、『嘉元仙洞御百首』での詠である。「和哥の浦」は宮廷歌壇を象徴する歌枕、「はま千鳥」の「跡」は筆跡のこと、ここでは歌草を意味する歌語である。そして「五代」は、俊成・定家・為家・為氏・為世と続いてきた御子左家代々の宗匠を、「なゝたひ」は『千載』『新古今』『新勅撰』『続後撰』『続古今』『続拾遺』、そして今回の『新後撰』と、七度の勅撰集撰進の業に、自身を含めてこの五人が関わってきたことを意味する。そのような自負をこめた作品をあえて自撰したこの集の人気は、決して高いとはいえない。むしろ直後の『玉葉和歌集』と対比されて、「平板陳腐のそしりは免れ難い」（『日本古典文学大辞典』）などと評されがちである。けれども、平穏を求め安泰を願う中世の人々の心は、その「平板陳腐」な歌ことばの裡にも潜んでいるのである。その意味において、この集ももっと丹念に読まれてよいであろう。本書はそのための基本的資料である。

（平成八年六月一三日刊　菊判　四八〇ページ　笠間書院）